

# キリスト教宣教としての茶の湯

—大阪の史跡を中心に—

朴 賢 淑

## Tea Ceremony as a Christian Mission: Focusing on Historic Sites in Osaka

Park, Hyun Suk

### 抄 録

本稿は2019年12月から2020年3月までに大阪女学院図書館にて行われた展示「お茶とキリスト教」を論考としてまとめたものである。大阪女学院は大阪城の近くに位置し、16世紀後半には、大阪を中心に広げられた政治・文化と共にキリスト教宣教の中心地でもあった。

当時のカトリック教会は教会の中に茶室を設けるなど、宣教に茶の湯を積極的に取り入れ宣教活動を展開していった。

このようなキリスト教の日本における土着化と宗教的な寛容性を認める宣教方法が展開されたことで、秀吉のバテレン追放後も大阪とその周辺にはキリスト教信仰が継承されて行き、今日においてなお私たちはその宣教の跡をたどることができる。

**キーワード：**大阪、キリスト教宣教、茶の湯、千利休、高山右近

(2020年9月25日受理)

### Abstract

This paper is a compilation of the exhibition “Tea and Christianity” held at the Osaka Jogakuin Library from December 2019 to March 2020. Osaka Jogakuin is located near Osaka Castle, and in the latter half of the 16th century, during the Toyotomi Hideyoshi era, it was also the central stage of Christian missions along with the politics and culture spread around Osaka.

The Christian church at that time actively incorporated the tea ceremony into its mission and set up a tea room in the church to develop various missionary activities. In addition, by incorporating the tea ceremony into the practice of Christian ministry and religion, the spirituality of Christianity can be seen in the tea ceremony of Sen no Rikyu.

With the development of such missionary methods that recognize the indigenous Christianity and religious tolerance in Japan, the Christian faith was firmly inherited in and around Osaka even after Hideyoshi's expulsion of Batteren, and today we can still follow the trace of that ministry.

**Keywords:** Osaka, Christian mission, tea ceremony, Sen no Rikyu, Dom Justo Takayama  
(Ukon Takayama)

(Received September 25, 2020)

## はじめに

本稿は昨年、大阪女学院の図書館で行われた展示会「お茶とキリスト教」(2019年12月～2020年3月)を踏まえた上で、大阪における16世紀カトリック教会のキリスト教宣教がどのように展開されたのかについて、宣教の担い手であるヨーロッパ・カトリック教会が日本という異文化の土壌にキリスト教的なアプローチをどのように試みていたのかという宣教学的な視座から考察を加えたものである。

特に大阪女学院の図書館展示に際し、大阪とその周辺を中心に展開された16世紀キリスト教の宣教に茶の湯を取り入れたことが宣教学的にどのような意味を示しているのかについて、これまでの先行研究および現在まで公開・発刊されている史料や書籍を通して考察を行う。

まず、研究の根拠となる豊臣秀吉(以降、秀吉と表記する)のキリシタン迫害から禁教に至る江戸時代にかけての茶の湯やキリシタン関連の史料、家系図などについてであるが、これらの史料は現在、殆ど残されていないものの<sup>1</sup>、欧米においては16世紀後半以降に渡日した宣教師たちによる報告・書物を一次資料として用いることが可能になり、日本語に翻訳されつつある。

例を挙げると、1549～93年までの日本の宣教報告書であり、ルイス・フロイスが著した『日本史(全12巻)』(*Luis Frois, Historia de Japam, 5 vols. 1976-1984.*)<sup>2</sup>や、ザビエルと共に来日したジョアン・ロドリゲスによる『日本教会史』(*Rodriguez, Joaõ. Historia da Igreja de Japam*)<sup>3</sup>が日本語に翻訳・刊行されている。

そして15～17世紀の大航海時代、西欧人による日本を含む非西欧の記録(航海記、探検記、見聞録)を日本語に翻訳・集大成した『大航海時代叢書』が、1960～92年にかけて岩波書店から出版されている<sup>4</sup>。

ところが、最近発表された論文や書籍から見れば、これらの資料を用いた研究や議論がそれほど活発に行われているとは言えない。そこで本稿においては、西欧から見た日本について、特にキリスト教宣教を担った宣教師の目を通して見る日本、そしてキリスト教宣教と異文化交流と言う宗教的な側面から複眼的に分析を行う。

先行研究に関しては、先ず千利休が完成した侘び茶とキリスト教との関わりについて、すでに表千家、裏千家、武者小路千家の家元もその事実を認めているが<sup>5</sup>、特に裏千家に関しては家元の千玄室は、「利休の茶の湯が伝える平等・寛容の精神性」はキリスト教の精神がその土台となっていることを明らかにしている<sup>6</sup>。

また、茶の湯における宗教性については倉沢行洋が「茶道と宗教：キリシタン宣教師の見た日本の茶湯」の中で、日本の茶湯における禅宗的な宗教性を捉えつつ、宣教師たちが

茶の湯をどのようにキリスト教宣教に取り入れていったのかを明らかにしている<sup>7</sup>。

特にキリスト教宣教と茶の湯の関連性については、スムットニー・祐美の著『茶の湯とイエズス会宣教師：中世の異文化交流』<sup>8</sup>を挙げるができる。スムットニーは茶の湯の担い手である茶人とキリスト教宣教を担った西欧宣教師との交流を主に異文化交流の側面で考察している。来日した宣教師たちが1581年以降『イエズス会士礼法指針』が作成されたヴァリニヤーニの提言、すなわち日本で建てられる新しい教会には必ず茶室を設け、人をもてなすと同時に茶の湯を神学生の修行の一環として取り入れ、ヴァリニヤーニの提言を実現していたことをその著書の中で明らかにしている<sup>9</sup>。

茶の湯を通して交流した人々と交流を深めていく中で、宣教師たちは宣教の課題を適応主義として日本で具体的に実践して行ったという視座は、今日の宣教学における一つの示唆をもたらすと考えられる。

以上の先行研究を受け、本稿では「茶の湯とキリスト教の宣教」が大阪を中心に、どのように繰り広げられたのかを考察してみることにする。そして、これらの事実が今日を生きる私たちにどのようにキリスト教を広めていくのかという宣教学的示唆を与えてくれるのかを明らかにしていく。

## 1. 時代的背景

### 1. 1. 秀吉と大阪城

日本にキリスト教がもたらされた16世紀後半、日本と世界はどのような状況にあったのか。まず、その時代的な背景を言及することにする。日本において同時期は戦国時代から安土桃山時代へと移行していた時期であり、特に大阪においては織田信長の亡き後、秀吉が勢力を強めていた。

山崎の戦いの後、天下を掌中にした秀吉は、次に大阪城築城に取り掛かった(1583〈天正11〉年)。それは信長の安土城を超える規模の城を造ることで新しい天下であることを世に示すためであった。実際、秀吉が築いた当時の大坂城は現在の4～5倍と広大なもので、現在の大阪城公園域を東北角にし、西の端は東横堀川あたり、そして南の端は玉造本町付近で現状の約4倍、約400万平方メートルもの広い地域にあったとされる<sup>10</sup>。

また、秀吉の大阪城はそれまでの常識をくつがえす城でもあった。それまでの大名たちは京にも日本海にも容易に出られる琵琶湖周辺に城を構えたが、秀吉は古くから京都・奈良などへの水運に利用されて来た淀川の河口付近に、城を構えることにしたのである。というのは、この地は瀬戸内海の航路を経て九州、さらには朝鮮半島や中国につながる交通路の重要な地点でもあったからである。

そして、一向一揆の対決で織田信長でさえ抑え込むまでに11年間もかかった本願寺があったその寺跡にその城を築き、「信長公の跡継ぎとして」の立地を固める大プロジェクトでもあったのである。

ところが、秀吉はこの城構築のすべてを大阪周辺の大名たちに負担させた。禄高に応じ

て、石の量や人夫の数も細かく決められ、期日までに達成できないと封禄や領地が没収された<sup>11</sup>。

その負担は大きく、大名の中には多大な経費に耐え切れず、刀や鉄砲、衣類などを二束三文で売り払う者までいたとされ、またそれでも責任を果たせない者は、自刀して果てたとされる。その中、築城の名手であり、大阪におけるキリスト教宣教のチャンスを得ようと高山右近（これ以降、右近と表記する）は、普請などに腕を振るい、巨石を献上している。右近が献上した巨大な石は輸送するのに1,000人の人手を要したものであった、とされる<sup>12</sup>。

## 1. 2. キリスト教宣教と日本

さて、日本の堺、能登、加賀、越中の地が、ヨーロッパの世界地図に初めて登場するのは西暦1590年代である。これには日本にキリスト教が伝来したことと関連している。1595（文禄4）年、オランダ人がイエズス会士の知識を基に作った「日本図」には、Sacay（堺）、Canga（加賀）、Novi（能登）、Hietchu（越中）などの国名が表示されているが、アルファベットで記された日本国内の旧国名の殆どは、当時、キリスト教会が建てられた土地が多い。つまり、日本が他国との関りを強め始めたのが、本稿で取り上げるキリシタン右近が活躍していた16世紀後半であったことが分かる。

それと同時に、ここで宣教師たちが世界史に果たした功績について言及しなければならない。まだ世界に対してベールに覆われていた日本と日本の文化、地理などについて世界に発信し始めた当時の宣教師たちは、その職務上、足利義輝、義昭、織田信長、豊臣秀吉をはじめとする政権の座にあった人々から名もなき庶民に至るまで、貴賤貧富の各種各層の日本人と広く交際をしていた<sup>13</sup>。

また、異国人として日本人が日常茶飯のこととして筆録しなかったことも好奇心と興味を持って描写している。ここから、宣教師たちの見聞きしたものやその記録などを通して、ようやく日本が世界につながったとすることができる。そういう意味において、16世紀日本においては、キリシタンと宣教師を通して、東と西の世界が出会ったと言えるだろう。

## 1. 3. 東西文化が出会う堺

元々、堺という名称は摂津、和泉、河内の三国の国境に当たることに由来する。小さい漁村に過ぎなかった堺が、その後、地の利を生かして次第に畿内と瀬戸内海を結ぶ重要な港へと発展していった。現在、堺の遺跡から出土している陶磁器類は備前、丹波、瀬戸などの国内産の陶磁器はもちろん、朝鮮や中国の青磁・白磁、青花などが発掘されている。当時、堺は国内港だけでなく、国際貿易港として対明貿易の窓口としての役割も果たしていたのであった。

この堺をめぐる、織田信長は権力と財力を持つ堺支配をもくろみ、「堺名物狩り」をしている。続く秀吉もそれを踏襲しているが、堺が飛躍的に富を蓄積したのは、遣明船の発着港になったことが大きく関わっている。

1476（文明8）年に遣明船の発着港は兵庫から堺へ移り、以後、堺は急速に国際港とし

て地歩を築き、自治都市へ発展する。それ以後、堺は琉球や東南アジア、さらには南蛮貿易の窓口としても栄える。当時の博多港に比べ、奈良、京都に近く、政治・宗教の中心である奈良、京都の門戸港、玄関港として発達することになった。

また商港の堺は、貿易による関税収入、納屋、土倉などの金融業による莫大な利益などで富が蓄積され、会合衆（納屋衆）と言われる有力市民を中心とした自治都市の体制を築いていった。1781～89年（天明年間）、会合衆は三宅、池永、湯川など10人がおり、十会合と言われ、町政の中心になった。彼らは武士集団を傭兵として雇い、海を背にして、南、北、東に濠をもうけて要塞化し、自衛組織を持っていた。このようなことから、堺は「東洋のベネチア」と例えられていたほどであった<sup>14</sup>。

さらに、堺が国際貿易港として栄えた博多港と差別化されるのは、堺は火薬、鉄砲貿易が行われた港である、ということである。

信長が武田信玄との戦いで鉄砲を使って圧勝した通り、堺は鉄砲と火薬、塩などで経済力をつけるようになり、京都、大阪、奈良の公家や武士は堺の経済力を無視できなくなっていた。利休の茶の湯の師・武野紹鴎も戦国時代武具に用いられ武士が欲しがっていた皮の貿易商であったように、千利休が信長の茶頭時代、鉄砲の火薬の調達に腕をふるい、信長から褒められていることから、堺の茶人が同時に軍需貿易の商人であることを意味している<sup>15</sup>。

## 2. 茶の湯とキリスト教の接近

### 2. 1. 茶の湯

お茶は元々、中国の唐では飲用だけでなく薬用としてもその価値が見出され700年頃には『茶経』が著されたことで広まった。日本で禅宗を請来した栄西禪師は、1214年に鎌倉幕府第3代将軍の源実朝が酒を飲み過ぎて具合が悪くなったと聞き、『喫茶養生記』に茶による心身の効用を書き記し、お茶を献じたとされる。その後、日本では禅宗を通してお茶は広がった<sup>16</sup>。特に、「茶禪一味」という言葉が象徴しているようにその両者は深く関わっているとされて来た。一見、禅宗を背景にした喫茶の風習は茶礼に基づくものであると考えられているが、高橋敏夫はその著の中で、「実はキリスト教の精神が色濃く宿っている」と主張している<sup>17</sup>。

室町幕府の滅亡（1573〈天正元〉年）後、信長は権力維持の一つとして足利將軍家の伝統を継承して「茶の湯御政道」を設け、茶の湯を政治に取り入れた。これを明確に示してくれるヨーロッパの文献が残っている。1617年スペイン・マドリードで『日本の迫害』を著したイエズス会士ピネイロ（Pineyro, S. J.）はその第3巻の中で、「お茶は非常に宝物であるので、日本人はそれを極めて高価な器で保存している。それは土でできているとは言え、茶の精粉を完全に守る質をもっているから、彼らはそのために自分の刀と同じような高価を払う<sup>18</sup>」と記しているように、日本人が茶の湯道具に多額の金額を支払うことは、ピネイロのようなヨーロッパ人にとっては注目に値するものであった。

当時、ヨーロッパから渡来した宣教師たちは、茶の湯が発展していた利休の故郷・堺を拠点としていた。その堺の地で、宣教師たちは日本人と日本の文化を良く観察している。その結果、より実り多い宣教のため、この時期、日本における宣教方針を決めていた巡察師ヴァリニヤーンは、「教会は深く日本人と関わり、特に茶の湯に関しては心を砕き、教会に茶室を造り、茶の湯に関するすべての道具を調べ、宣教師自ら茶の湯を学び、不慣れな場合は茶頭を雇い要人たちを接待してもてなしをするように」<sup>19</sup>、との指針を示している。

それを受け、それ以後、宣教師たちは教会を建てる際も茶の湯をキリスト教の宣教活動に取り入れていく方法を取っていったことが分かる<sup>20</sup>。

## 2. 2. 茶の湯と宣教師の出会い

日本でキリスト教と茶道が出会ったのは、フランシスコ・ザビエルの時代にさかのぼる。日本に初めて南蛮船が到来したのは1543年、ザビエルが渡来したのは1549年であった。

先ず、渡来した西欧人は日本人がお茶を飲む様子を初めて見た際、どのように感じていたのかについて考察して行くことにする。

ザビエルが日本に上陸する3年前の1546（天文15）年、鹿児島に数か月滞在した商人ジョージ・アルヴァレス（Jerge Alvaares）は、日本人が飲むお茶をハーブと呼び、「彼ら（日本人）は冬に香草を混ぜた水を喫するが、それが何であるか私には分からなかった。日本人は夏も冬も冷たい水を喫することはない。」と日本人の喫茶文化についてヨーロッパに紹介している。しかし、アルヴァレス本人が書いているように、彼は「彼ら（日本人）が喫するハーブ」が日本茶であることまでは知らなかった<sup>21</sup>。

その9年後の1565（永禄8）年、宣教師アルメイダはようやく、「日本人が喫する」それがお茶であるとし、日本のお茶文化を報告している。そして、その20年後の1585（天正13）年、宣教師フロイスは、イエズス会士たちの日本とその文化理解を深めるため著した『日欧文化比較』<sup>22</sup> (*Tratado en que se contem muito susintae abreviadamente algumas contrações e diferenças de costumes entre a gente de Europa e esta provincia de Japão, 1585*) の「第6章:日本人の食事と飲酒の仕方」の中で、「われわれの間では、日常飲む水は冷たく澄んだものでなくてはならない。日本人のは熱く、そして茶の粉を入れて、竹の刷毛で攪拌することが必要とされる」と、西欧と日本の飲み物の相違について述べている<sup>23</sup>。

フロイスの『日欧文化比較』が出版された翌年（1586年）、ザビエルが堺を訪れた時、豪商であり茶人であった日比屋了慶がザビエル一行を手厚くもてなしている。『天王寺屋会記』に記されているように、了慶は様々な茶会の場を通して、顔なじみの豪商たちと日々、茶の湯を嗜んでいたことが分かる。この日比屋邸を訪れた宣教師のルイス・アルメイダは、長旅の疲れから病気になり、しばらく（その療養の期間は25日間だったとされる<sup>24</sup>）、日比屋家で静養することになった。やがて、アルメイダが次の旅に出る際に、了慶は自分の受洗の喜びと、快気祝いを兼ねて自宅で茶会を催し、アルメイダを茶の湯に招いた<sup>25</sup>。

アルメイダは当時の様子をこのように振り返っている。「食事が終わってから、私たちは皆ひざまずいて、我らの御主デウスに感謝いたしました。これは、日本のキリシタンたち

の良い習慣だからです。<sup>26</sup>」とあるように、キリシタン茶人である了慶は食事が終わると祈りを捧げることを既に習慣としていた。食後の祈りに続いて、茶を点て茶の湯とキリスト教の両者にある儀式的な厳粛さを茶会の中でみごとに調和させたのである。これが最初の茶の湯とキリスト教との出会いであるとされる<sup>27</sup>。

また、この日、日比屋了慶が茶会において亭主自ら食事を給仕することは歓待を示すものであり、当時の堺では根づいた慣わしであった<sup>28</sup>。この了慶のもてなしに、スムットニー・祐美は次のような神学的な解釈を行っている。つまり、食事→祈り→茶の湯という順序で行われていた一連のもてなしは、それを越えたところの一種典礼のようであって、日比屋了慶の茶道は彼の信仰と結ばれており、了慶の信仰が浸透していたものである、と指摘している<sup>29</sup>。

アルメイダの了慶邸でのお茶のもてなしと共に行われた祈り会の体験以後、ザビエルはこの茶の湯に注目し、宣教師たちが多くの人と茶を介して交わることが、キリスト教宣教において大切であると示している<sup>30</sup>。

しかし、『お茶とミサ』を著したピーター・ミルワードはその著書の中で、まだこの時期においては「宣教師の記録には、まだ茶会と聖餐式の関係についての考察が一言も言及されてないことが注目に値する」、と評しているのは興味深い<sup>31</sup>。

一方で、当時、戦国時代のリーダーたちは、南蛮貿易に強い関心を持ち、外国の商人たちと競うように交流を持った。そして、外国の商人たちと共にやって来た宣教師たちとの交流も盛んであった。それは時の人であった信長や秀吉はもとより、堺の商人である千利休も例外ではなかったのである<sup>32</sup>。それでは、千利休は外国からやって来た商人や宣教師とどのような交流をしていたのだろうか。

### 2. 3. 東西の宗教観の一体感を見出した千利休

利休が茶道に新しい道を開いた頃、キリスト教は徐々に日本中に広がり、戦国大名や貴族の間に多くの入信者を得ていた。その中でも、右近や小西行長らのキリシタン大名は利休の茶道における弟子として知られている。また蒲生氏郷、明智光秀の娘である玉（ガラシャ夫人）を夫人とし実母や息子が受洗している細川三斎や、瀬田掃部、牧村兵部、古田織部などキリシタンとされる人々が利休の周辺にいた<sup>33</sup>。

利休がキリシタンであったかについて、山田無庵はその著『キリシタン千利休』の中で、神戸市立南蛮美術館所蔵の狩野内膳の作品における「南蛮屏風の右隻中にいるイエズス会やフランシスコ会の宣教師と共にいる老茶人が利休である」<sup>34</sup>、という諸説を展開している。

またこの他にも多くの持論が交わされているが、利休がキリスト教を積極的に排除しないものの、イエズス会宣教師による洗礼者名簿やキリシタン名簿に利休が全く言及されていないこと、利休がキリスト教では禁止されている一夫多妻制婚であったことなどから利休キリシタン説を否定している<sup>35</sup>。

しかし、2016年の高山右近福者認定記念に際し、バチカン教皇庁が明らかにした高山右

近とその業績の一つ「教会の柱石」中で、「(高山右近が) 千利休を含め、彼の多くの弟子たちにキリスト教を伝え、何人もの人をキリスト教に導き」<sup>36</sup>との記述がある。

そこで、「(右近が) 千利休にキリスト教を伝え、キリスト教に導いた」その根拠となる史料を明らかにすることが、茶の湯とキリスト教の関わりがより浮き彫りになる可能性があるのではないかと考えられる。

前述したように、利休は大阪と京都にほど近い国際貿易港、堺の商人であった。そこには、すでに礼拝場または、教会があった。また千利休は教会が堺で礼拝場として提供されていた日比屋了慶と交流があった。当時、了慶邸は人々に開放され、宣教師たちによるミサが行われていた、とされる。

千利休の家は、礼拝場として使われていた了慶邸から 500m 先離れた場所である。そのことから、利休は了慶の屋敷内の聖堂で、宣教師が畳の上でミサを行うのを見て、そのミサの所作から強い影響を受けたのではないかと、との主張を高橋敏夫はその著『茶の湯の心で聖書を読めば』の中で明らかにしている<sup>37</sup>。

また、その後、日本にキリスト教が拡大して行くと同時に、千利休の侘び茶が人々に受け入れられるようになる。この両者の普及した時期が重なっていることは何らかの意味があると言い得る。

## 2. 4. 聖餐式と茶の湯

それでは千利休の茶の湯とキリスト教は、どのような関りがあるのだろうか。それはキリスト教の聖餐式の中に見出すことができる。聖餐式には、新約聖書におけるイエス・キリストが十字架の死を目の前にして、弟子たちと共に行った「最後の晩餐」の場面がその起源となっている。

新約聖書の福音書（マルコ 14：12～21、ルカ 22：7～14、21～23、ヨハネ 13：21～30）によると、最後の晩餐はユダヤの過ぎ越しの祭りの時期であったことが分かる。「過ぎ越しの祭り」とは、旧約聖書に起源を置くモーセに率いられたイスラエル人がエジプトを脱出したことを記念し、家族が一堂に集まって祝う祭りである。

カトリックの司祭ピーター・ミルワードは、その著書である『お茶とミサ』の中で新しい契約としての聖餐式の意味を強調し、お茶室の中で聖餐式を試みている<sup>38</sup>。すなわち、この過ぎ越しの祭りを祝った「最後の晩餐」のその夜はイエスと弟子たちが家族として一堂に集まり、神とイスラエルの民が結んだ「旧い」契約を記念していた。しかし、その最後の晩餐は「旧い」契約を祝っただけでなく、それと同時にその夜から始まるイエスの受難と十字架の死を通して、「新しい」契約が始まる記念すべき日であった。イエスは食卓にあるパンとぶどう酒をこの記念日に取り入れたのである。

過ぎ越しに用いられるパンは、イースト菌が入っていないパンである。イスラエル人がエジプトから逃れる時、火急のあまりパンにイーストを入れて焼く時間がなかったことを記念して食べられるようになった。イエスはこのパンを手に取り、弟子たちに「これはあなたたちに与えられる私の体である」。また、同様にぶどう酒のグラスを手にとって、「これ



はあなたたちのために流される私の血である」、と宣言した。このようにして、イエスはパンとぶどう酒というごく平凡な食物の基本的な材料を使って、旧約のいけにえである小羊の肉の代わりに、イエス自身の体と血を象徴的にあらわす「新しい」契約を弟子たちと交わしたのである<sup>39</sup>。

つまり、ザビエルやイエズス会の宣教師が16世紀の日本に伝えたカトリック・キリスト教は、礼拝ごとに行われる聖餐式に神秘的な意味が含まれていたのである<sup>40</sup>。そのキリスト教の宗教的儀式を通して、千利休は最も深く感銘を受け、その精神の土台とされる「平等と寛容の精神<sup>41</sup>」を茶の湯に取り入れることを試みたのではないかと解釈することができる。

## 2. 5. 高山右近とお茶

それでは、キリシタンであった右近はお茶を通して日本にキリスト教を広めることのできるような役割を果たしたのか。ここでは、右近とお茶、そしてキリスト教との関係をたどってみることにする。

右近が洗礼を受けたのは幼名・彦五郎を名乗っていた12才の時（1546年）であり、洗礼名はジュスト（「義人」の意）であった。つまり、右近は大名として世に出る前に既にキリシタンとなっていたことがわかる。また右近はポルトガル語を習得し、宣教師たちからさらに深く聖書を学び、領民や知人に聖書を説いたり、洗礼を受けたりしていた<sup>42</sup>、とされる。

右近は「武将」「キリシタン」「茶人」の「3つの世界」を持っていたとされるが、ここでは茶人右近に焦点を当て述べることにする。まず、高山右近が千利休の茶の湯に出会ったのは『津田宗及茶湯日記』によれば、1577（天正5）年、高槻城主となった右近は24才にして茶会を開き、師である利休や宗及を招いた<sup>43</sup>と記されている。

そして、織田信長の死後、2人は急速に接近していく。信長は1582（天正10）年6月、本能寺で自分の集めた茶道具を披露する茶会を催した翌日、明智光秀の謀反によって、自ら命を絶っている。秀吉が山崎の戦いで主君の敵・明智光秀と対峙した時、近隣の武将たちが我先に先陣を名乗り出ている。

その時、右近は「昔から先陣を定める時には、敵に近いところの武将を立てるが先人の倣い、さらば、私の居城高槻は、光秀の居る山崎に接している。故に先陣は私を措いてはいないはず。」と申し出て、他の武将を退けて秀吉の心をつかんでいる<sup>44</sup>。

そして、この戦いに勝利した秀吉は、ついに天下人にまで昇りつめた。勝利を勝ち得た山崎の地に、秀吉は利休に茶室建築の命令を下す。命令を受けた利休は木材の目利きを右近に依頼している。すなわち、「茶の湯御政道」から考えると、山崎合戦の勝利を通して秀吉と大名・右近は親密な関係を結ぶことになり、さらには茶人利休と右近との交流もより深まっていった<sup>45</sup>、と考えることができる。

千利休の7人の高弟（利休七哲）の一人として数えられている右近であるが、千利休の孫・宗旦は、その著『茶道抑聞書』の中で、千利休が残した言葉として「高山殿には必と

沙汰致し申さざる様に致申候、高山殿と南坊とは利休極上一の弟子也」と、千利休自らが弟子の中で右近を「極上一の弟子」として語っていたことを明らかにしている<sup>46</sup>。その師・利休により右近が利休の極上一の弟子と認められたのは、利休の茶の湯における右近の功績があったことを示している。最近の研究では、この文章の中に、利休の侘び茶が展開されていく鍵となるものが秘められていたのではないかと考察されていて、利休がキリシタンに囲まれ、大きく影響を受けて、侘び茶の研鑽を積み完成に至ったのではないかと、という見解が示されている<sup>47</sup>。

このことに関して、既述した千玄室家元が示した利休の侘び茶におけるキリスト教の精神性というのは、右近が師や茶人の仲間との交流を通してその全人格であらわしたキリスト教信仰の実践と精神性において、「極上一の弟子であった」のではないかと考えることができる。

またキリシタン茶人右近が、どれほど利休の侘び茶に傾倒していたかについて、当時の宣教師ジョアン・ロドリゲスも『日本教会史』の中で、「右近が茶室に退くたびに神に礼拝を捧げ、祈りの修道を怠ることがなかった」と述べながら、次のように言及している。

「高山ジュスト（右近）は、キリシタンであることによって大変有名であるが、その信仰のために、二度追放されて領国を失い、その二度目はフィリピンに流され、その地で辛労により没したが、殉教の栄光を彼は失わなかったと思われる。……彼はこの芸道（茶の湯）で日本における一人者であり、そのように厚く尊敬されていて、この道に身を投じてその目的を真実に貫く者には、数奇（茶の湯）が道徳と隠遁のために大きな助けとなることがわかった、と良く言っていたが、われわれもそれを時折、彼から聞いたのである。

それ故、デウス（神）にすぎるために一つの肖像をか的小屋（茶室）においてそこに閉じこもったが、そこでは、彼の身につけていた習慣によって、デウスにすぎるために落ち着いて隠遁することができたと語っていた。このことから数奇について、日本人がなぜあれほど尊重するかという理由と、国内において習慣なり、さらに儀礼上の歓待のことなるの上に及ぼしている数奇の効能とが十分に理解されるであろう。」<sup>48</sup>

このようなロドリゲスの記録を通して、キリシタン高山右近にとって茶室は祈りと黙想のための礼拝の場であり、高山敏夫はその著の中で右近が常日頃、「茶事を尊重することはキリストに従うための良い修練である」と語っていたことを明らかにしている<sup>49</sup>。つまり、お茶は右近においては神に近づくための宗教的な修行として毎日用いられていたことが分かる。事実、秀吉のバテレン追放令以降、右近にとって茶室は人目をしのんで神に祈りを捧げる唯一無二の場所となっていたと考えられる<sup>50</sup>。

## 2. 6. 茶の湯を通してのキリスト教宣教

それでは茶の湯を用いたキリスト教宣教は成功したか否か。結論として、それは宣教の担い手たちによって肯定的に受け入れられていったとすることが出来る。その根拠としては、第1に現存する南蛮文化とその資料の中に、西欧人である宣教師たちが日本式の畳部屋で、人々と交流している様子が生き生きと描かれていることが分かる。それは16世紀後半に、アジアとヨーロッパが初めて出会った際、西欧から伝えられたキリスト教が日本に受け入れられるための宣教的な取り組みの一つであった、と見ることができる。

第2に、現在大阪とその周辺に残されているキリスト教の史跡を通して言えることは、この時期、キリスト教会を「南蛮寺」と言うほど、日本とその文化の中に深くに浸透したことにより、その後の秀吉や徳川幕府のバテレン追放や禁止令によって1908年再びイエズス会士が日本を訪れるようになるまでの300年の間、キリスト教宣教が禁止された時期、信仰を守り続けた群れが残っていたことが分かる。

例えば、かつて右近の領土であった高槻付クルス山（「十字架」の意）で発掘された「キリシタンのロザリオ」が西欧のものとは異なり、日本の数珠108個に近い球数であったこと、また右近の転封地であった明石のお寺で発見された「仏が刻まれている鉄製の十字架」、その他にも南蛮寺やキリシタン村落がいたとされる地域付近の社寺で、幼子イエスを抱えている母マリアの地蔵や十字架などが発見されていることから理解できる。

この時期の特にイエズス会によるアジア宣教は、その土着のものを受け入れることにより多くの成果をあげたものの、例えば、仏教用語を用いて神学を表現したことによって教理の本質を誤解されるきっかけともなった、という問題点を内包していたことも事実である。

しかし、いわゆる隠れキリシタンの時代以降、日本各地に蒔かれた福音の種が社寺などを通してその信仰が守られていたことは、宣教地の文化に寛容的な態度を示した宣教方法の成果であったと見ることもできる。

また、西欧からもたらされたキリスト教を日本という宣教地の文化に根付かせるために、あえて西欧のものであることに執着せず、日本各地に建てられたキリスト教会を日本人に馴染みやすい「南蛮寺」としてアピールしていたことや、教会の中に茶室を設けて、日本の人々に近づこうとした当時のイエズス会の宗教的な寛容性とキリスト教宣教への熱心さがもたらした宣教の底力である、と捉えることができる。

第3に、今も利休の茶道において、利休が目指していたキリスト教的な精神性（平等、宗教的な寛容）が脈々と流れていることを考える時、宗教において大切なものは形式的なものであるよりは、目に見えないけれども大切なものであり、それは隠れキリシタン時代という教会の存続が困難な時代にも、茶の湯を通してその精神性を伝承していたことが分かる。

### 3. 茶の湯とキリスト教に関する大阪の史跡

『大坂：豊臣と徳川の時代』を編纂出版した大阪歴史博物館・大阪文化財研究所によれば、大阪市内で中近世の遺跡調査が本格化したのは今から40年前の1980年代であるとされ、その中でも、「豊臣時代大阪城下の大名屋敷」に関しては、まだまだ謎が多く、今後も発掘の成果に大きな期待がかけられていることが明らかになっている<sup>51</sup>。

特に、宣教的な側面からすれば、これら16世紀後半におけるキリスト教関連施設や屋敷から発掘される史料は、日本のみならず、当時の西欧宣教師やその宣教の歴史をたどる最良の研究材料として、世界的な価値があるものと考えられるからである。

#### 3. 1. 利休の井戸跡（玉造稻荷神社「利休井」）

大阪女学院の近くに一時期千利休が屋敷を構えていた、という記録が残されている。

『摂津名所図会大成』によれば、「千利休が玉造・禰宜町（玉造稻荷神社南側）屋敷を構えていた」とされている。当時、利休の茶会が開かれる際には、「この辺りの良質な水が邸内の井戸から汲まれ、茶の湯に使われた」とされる。この付近の地名「清水谷」も当時の利休の影響から付けられたものである、と言い伝えられている<sup>52</sup>。

また、利休が生駒山系を眺め茶会を催したという伝承が残っていて、利休ゆかりの地として「千利休居士顕彰碑」が建てられ、「利休井」が再掘されている。

#### 3. 2. さかい千利休屋敷跡

大阪の堺は、室町時代から商人の町として栄えており「東洋のフィレンツェ」と呼ばれるほど発展を重ねて来た。千利休の生きた時代は、堺の港からキリスト教の宣教師たちも大勢来日し、関西の中心地となっていた。

堺にある千利休の屋敷は、当時の地図によると、キリシタンの集會が行われたとされる日比屋了慶の屋敷であり教会であったとされる「さかいザビエル公園」に隣接していることが分かる。

また、現在、千利休屋敷跡の近くに位置する堺市の施設「さかい利晶の杜」には、利休の茶室『待庵』が、堺市博物館の研究成果に基づき再現されている。

#### 3. 3. 堺教会堂址：(旧) 日比屋邸（さかいザビエル公園）

16世紀当時、多くの宣教師たちは九州から上洛する時は、堺港を利用して来た。また『日本史』第67章によれば、ザビエルは京都が戦乱で荒廃した時、またフロイスは京都の寺から迫害を受ける度々、堺にある日比屋了慶の所に避難していたことが分かる<sup>53</sup>。

イエズス会士のザビエルが来日した1549（天文18）年、日本はイエズス会インド管区に属していた。インド管区は、ゴアを拠点とし日本以外にもマラッカ、モルッカ諸島などが含まれていて、通常、同じ管区内で人材および物資は一元化して管理されていた<sup>54</sup>。

『イエズス会日本年報』（1581年）には、この頃、「堺には既に100人のキリシタンがい

て、その中の数人は堺で名誉ある者であったため、その庇護のもと、パードレたちは堺に入ることができた」、と記されている。

堺に正式な教会堂が建てられるまで、日比屋の家の2階がミサを行う場として提供されていたためである。日比屋邸にあった茶室も2階で、平地より多少高い所に設けられていたとされるが、フロイスの報告に、「彼（日比屋）のものであった2階を司祭たちは居室とし、そこでミサを献げ、信者たちの告白を聴き、キリシタンたちにその他の秘蹟を授けたりした<sup>55</sup>。」とされることから、日比屋邸の2階が主に司祭たちが使用した居室であり、礼拝を捧げ、聖餐式が行われた場所であったことが分かる。

合わせて、この日比屋邸を礼拝の場として使用したのは18ヶ年以上もの間の長期間であったことがフロイスの報告を通して知ることができる。この日比屋邸は、現在、ザビエル（戎）公園として造成されている。ザビエル公園は1550年12月聖ザビエルが堺に上陸した来日400年を記念し、「聖フランシスコ・ザビエル芳躅の碑」も公園内に建てられている<sup>56</sup>。

また日比屋邸以降、正式な堺教会堂についてであるが、「パウロ太夫が家を数軒提供し、そこに仮の小聖堂を設けたが、すぐに異教徒からの反対があり、教会を新築することは出来なかった」という報告がなされている。ところが、その6年後の1586（天正14）年には、やがて信者が増大し裕福なキリシタンが増えた頃には、既に教会が設けられていた<sup>57</sup>、とされることから、堺の教会は1581年～1586年の間に建てられていたことが分かる。

建設された堺教会について、「周囲にお寺が4つあり、堺の全土を展望し得る」もので、「屋根には50クルサド<sup>58</sup>を費やした十字架が立ち、遠く海上よりこれを認めることができた」とされる。しかし、この堺にあったキリスト教会堂址について日本の記録には残されてない。おそらく、キリスト教禁教令のためであると考えられる<sup>59</sup>。

この聖堂はやがて1587年、秀吉の禁教令に伴い破壊された。今日に至るまで、堺の教会が建っていた場所がどこであったかについて、いまだ特定されてない状況にあり、『イエズス会日本年報』とフロイスの『日本史』など宣教師側の記述を中心に、今後、さらなる研究が必要とされる<sup>60</sup>。

### 3. 4. 大坂教会址

右近は秀吉の大坂城築城に積極的に携わったかわら、大阪城下に教会を建てその宣教を進めて行った。高槻領主であった右近が、大坂の教会とどのように関わっているのかについて、言及しなければならない。右近の大坂教会における功績がどれほど大きいものであるのかについて、現在の玉造カトリック教会内の壁画と、大聖堂前広場に右近の石像が建てられていることから、かなり知ることが出来るほどである。

秀吉が天下人になり大坂に城をかまえると、大坂を中心に天下が動くことを予測した右近は、大坂に教会を建てる事の重要性を認識し、これに前後して堺に教会を建てようとしていた宣教師たちを説得し、大坂での教会建設許可と土地提供を願い出るよう進言する。これに秀吉は天満橋付近の見晴らしのいい2千坪の土地を宣教師オルガンチーノに与えた。

これを伝え聞いた右近は大変喜び、必要な費用は全額負担させて欲しいと申し出た。右近は社寺にされそうになっていた五畿内で最も美しいと言われていた河内岡山（大阪府四条畷市）の教会を大坂に移築し、大坂教会として完成させたのである<sup>61</sup>。

1585年、やがて大坂に壮麗な教会（南蛮寺）が完成すると、右近はすぐそばに自らの館を建て、諸侯や貴人を教会に案内したり、キリスト教の教理を説明したりして、宣教に努めた。このようにして牧村政治や蒲生氏郷らを信仰へと導く。氏郷の古くからの盟友である黒田孝高（如水）や、利休七哲の一人・瀬田掃部も洗礼を受け、古田織部も右近を通じてキリスト教に深く感化された<sup>62</sup>。

大坂教会における右近や宣教師の活躍がどれほど活発であったのかについてであるが、当時、大坂城の大奥にまで数多くのキリシタン女性が入信していた、との記録が残っている<sup>63</sup>。また越中守の正室・細川ガラシャまでもが、受洗に至った。細川玉（洗礼名ガラシャ）が生涯にたった一度だけ訪れた教会が、この大坂教会であった。

大坂カトリック教会跡は、『耶蘇征伐記』の記述から大阪城の南に位置する天満の辺りであったのではないかと推定されている<sup>64</sup>。

現在の北大江公園付近とされる。「八軒屋船着場跡」碑の近くの階段道を登ると現れる高台である<sup>65</sup>。すなわち、これまでの考察を通して、現在大阪女学院が位置する玉造には千利休の屋敷があり、大坂城の近くには大坂教会が建設され、活発に宣教活動を展開していたということが分かる。

### 3. 5. 高槻城跡

高山右近が能勢郡（大阪府豊能郡）など4千石を恩賞として与えられ、摂津の国・高槻城主となったのは1573（天正元）年、21才の時であった<sup>66</sup>。築城の名人でもあった右近はその後5年の間に、高槻城を難攻不落の城に作り替え、また領土内の宣教活動を旺盛に行った。やがて次第に多くの家臣と領民がキリシタンとなった。1579（天正7）年3月2日、高槻城内の教会堂で行われたクリスマスやイースターには、畿内のキリシタン1万数千人が集まったとされる。

その2年後の1581（天正9）年3月には、高槻領内の教会に日本で初めてパイプオルガンが設置され<sup>67</sup>、その年のイースターにはパイプオルガンの荘厳な音色と、セミナリヨ（神学校）の生徒たちが歌うグレゴリオ聖歌が響き渡った。この時、イエズス会総会長に代わって各地を視察し布教活動の方針を伝える役目を担っていた巡察師ヴァリニャーノも、感激の涙を抑えられず、「まるでローマにいるようだ」と語ったとされる。またこの時、ヴァリニャーノは右近の招待に応じて、数日間、領内の20か所もある領内のキリシタン村落と小聖堂を視察し、右近の切願に応じて高槻の教会をレジデンシア（宣教師常住の住院と聖堂）に昇格させ、司祭フォルナレッティと、日本人修道士ヴィセンテ同院、他2、3人の同宿を助手や伝道士として送っている<sup>68</sup>。1583年のイエズス会年報によれば、高槻のセミナリヨには32人の生徒がいて<sup>69</sup>、1585年の上半期、高槻領には3千人の受洗者がいた、と記している<sup>70</sup>。

当時、高槻には領民約 25,000 人のうち、17,000 人のキリシタンがいたとされ、これは領民の 7 割までが洗礼を受けていた計算になる<sup>71</sup>。そのため、もはや領内では寺社は維持できず、不要になったものの中で適当なものは聖堂として使われた。また、周辺の山岳や村落にも信者が散在し、それらの山に十字架が建てられた、と記されているが、現代までも旧高槻領で「クルス山（十字架の山）」と言われる幾つかの山は、右近による宣教活動のゆかりの地である<sup>72</sup>。

やがてその後、右近が明石へ転封となった時（1585〈天正 13〉年）、右近は高槻のキリシタン信者の保護を秀吉に願い出ている。その後、高槻領は秀吉直轄領になった。それを分割し、高槻城と本領の管理は秀吉の甥で養子の秀次に<sup>73</sup>、認頂寺・能勢などの山間部は秀吉の秘書役だったキリシタンのシモン安成了佐の管理になったため、高槻にはフォルナレッティ神父と修道士一人、数人の伝道士たちが残り、セミナリオは大坂に移転することになった<sup>74</sup>。

それから 400 年経た今日、右近が高槻城主であった付近にはキリシタンたちの墓が発掘されている。1998（平成 10）年、高槻城後地内三の丸付近で大規模なキリシタン墓地が見つかったが、これらは日本で確認された最も古いキリシタン墓地であり、右近の時代には木造の会堂と宣教師の宿舎があった場所であった。

発掘された 29 基の木棺の中には、蓋に十字架が墨書きされており、棺蓋の一つには二支十字（先端が二又の十字架）が書かれ、ロザリオ（キリシタンが用いる数珠状の宗教具）を携えていた。ロザリオは木製で、小珠が約 90 点、大珠 1 点から成り、変形珠 3 点を繋いだ十字架を先端に装着したものである。本来のロザリオは 50 個あるいは、63 個の小珠から成るが、出土品はこの規定よりもはるかに多くの小珠を繋いでいて、108 個の珠を連ねる数珠に近い。

発掘された木棺には宣教師らしい墓も含まれていたが、庶民と同じように埋葬されていた。右近には差別的な意識がなく、身分社会の当時としては画期的なことであったと言える<sup>75</sup>。

また、その近くの山間部の旧家からも聖フランシスコ・ザビエル画像や、聖母マリア十五玄義図、キリシタン本などが見つかっているが<sup>76</sup>、近くの寺院教誓寺（浄土真宗大谷派）生まれで当時、小学校教員であった藤波大超氏が、東藤次郎氏の協力のもと、寺山で「上野マリア」とされる銘墓碑を発見したのを皮切りに、東氏の自宅で「聖フランシスコ・ザビエル像」や、数々の聖画、聖具が発見されている。さらに縁続きの中谷家でも、キリシタン遺物が発見された。これらの貴重なキリシタン史料を広く公開し伝えるために、そのゆかりの地に茨木市立キリシタン遺物史料館（茨木市大字千堤寺）が建てられている。

## 終わりに

これまで大阪とその周辺を中心に展開された 16 世紀キリスト教の宣教が、茶の湯を積極的に取り入れ、教会の中に茶室が設けられ、そこで諸宣教活動が活発に展開されていった

ことを考察した。

本稿の1章では、16世紀後半は日本と世界においてどのような時代的背景が伴っていたのかについて論じた。この時期は日本においては信長・秀吉の時代であり、ヨーロッパにおいては対抗宗教改革の一環として、カトリック教会によるアジア・アメリカ大陸への世界宣教が行われることにより、それまでバールに覆われていた日本が世界に出会う契機となった時期であることを明らかにした。

続く2章では、茶の湯とキリスト教がどのように接近していったのかについて、先ず茶の湯の「茶の湯御政道」の特徴について述べた後、茶の湯と宣教師との最初の出会いがどのようなものであったのかについて考察した。そして、宣教師たちによる茶の湯を通してのキリスト教宣教は、今日における宣教学的な視点でどのように評価できるのかを明らかにした。

第3章では、茶の湯とキリスト教に関する大阪周辺の史跡を取り上げた。特に、利休の井戸跡（玉造稻荷神社「利休井」）、さかい千利休屋敷跡、堺教会堂址（旧・日比屋邸：現・さかいザビエル公園）、大坂教会址、高槻城址を取り上げ、そのキリスト教における歴史的な背景や意義を明らかにした。

これまで「茶の湯とキリスト教の宣教」が大坂を中心に、どのように繰り広げられて行ったのかの考察を通して得た宣教学的視座として次のことが言える。第1に、16世紀後半欧米からの宣教の担い手たちは、日本の宣教地において新しく出会った茶の湯の土着性をより効果的な宣教を行うために取り入れていった、ということである。

第2に、宣教師たちと茶の湯に親しんだキリシタンたちの茶の湯への積極的な参加と日本のカトリック・キリスト教会への取り入れを受け、千利休も茶の湯の中にキリスト教の精神性を取り入れていった、と言える。また、このような宗教的な寛容は、大阪近辺の例を見てもバテレン追放後の隠れキリシタンの存在とその発見を通して見られることが分かった。

第3に、本稿で取り上げたように茶の湯とキリスト教との出会いは、大坂城とその周辺、特にさかい千利休屋敷跡、堺教会堂址（現・さかいザビエル公園）、天満橋の大坂教会（址）、高槻城（址）を中心に繰り広げられて行き、キリスト教的な精神性（他者への愛、人間尊重）をより効果的に展開できる交流の場として具体的に実践されていったと考えられる。

#### 【脚 注】

- 1 高橋敏夫『茶の湯の心で聖書を読めば』、いのちのことば社、2006年、27頁。
- 2 松田毅一・川崎桃太（訳）『完訳フロイス日本史（全12巻）』、中央公論社、2000年。
- 3 ジョアン・ロドリゲス（著）江馬務・佐野泰彦・土井忠生・浜口乃二雄（訳）『日本教会史（上）』『大航海時代叢書（第9巻）』、岩波書店、1967年と、ジョアン・ロドリゲス（著）池上茶夫・伊東俊太郎・長南実・土井忠生・浜口乃二雄・藪内清（訳）『日本教会史（下）』『大航海時代叢書（第10巻）』、岩波書店、1970年。
- 4 会田由・飯塚浩二・井沢実・泉靖一・岩生成一（監修）『大航海時代叢書』（第1期）、岩波書店、



- 1965年7月～1970年10月。
- 5 高橋敏夫、122頁。
  - 6 千玄室「巻頭の言葉：茶の湯が伝える平等・寛容の精神性」『知致』、致知出版社、2018年3月号。
  - 7 倉沢行洋「茶道と宗教：キリシタン宣教師の見た日本の茶湯」『宗教哲学研究』、1988年。
  - 8 スマットニー・祐美『茶の湯とイエズス会宣教師：中世の異文化交流』、思文閣出版、2019年。
  - 9 スマットニー・祐美、8頁。
  - 10 大阪歴史博物館・大阪文化財研究所(編)『大坂：豊臣と徳川の時代(近代都市の考古学)』、高志書院、2015年、199頁。
  - 11 ドン・ボスコ社(編)『高山右近：歴史・人物ガイド(その霊性をたどる旅)』、ドン・ボスコ社、2017年、55頁。
  - 12 ドン・ボスコ社(編)、55頁。
  - 13 フロイス(著)松毅一・川崎桃太(編訳)『フロイス「日本史」より：回想の織田信長』(中央新書328)、中央公論社、1989年(第8版)、解説Ⅵ。
  - 14 増渕宗一『茶道と十字架』、角川書店、1996年、41～43頁。
  - 15 増渕宗一、42～43頁。
  - 16 千玄室「巻頭の言葉：茶の湯が伝える平等・寛容の精神性」『知致』。
  - 17 高橋敏夫、18頁。
  - 18 スマットニー・祐美、43頁。
  - 19 高橋敏夫『茶の湯の心で聖書を読めば』、34頁。
  - 20 高橋敏夫、35頁。
  - 21 スマットニー・祐美、31頁 (Michael Cooper, *The Early Europeans and Tea, Tea in Japan: Essays on the History of Chanoyu*, Ed. by Paul Varley and Isao Kumakura (Honolulu; University of Hawaii Press books, 1989) p.103.
  - 22 ルイス・フロイス(著)岡田章雄(訳注)『ヨーロッパ文化と日本文化』、岩波書店、1992年。
  - 23 ルイス・フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』、6頁。
  - 24 高橋敏夫、25頁。
  - 25 高橋敏夫、25頁。
  - 26 『完訳フロイス日本史Ⅰ』、255～256頁。
  - 27 スマットニー・祐美、39頁。
  - 28 堺市博物館学芸課(編)『さかい利晶の杜展示館案内』、平成27年3月、30頁。
  - 29 スマットニー・祐美、40頁。
  - 30 千玄室「巻頭の言葉：茶の湯が伝える平等・寛容の精神性」、2018年3月号。
  - 31 ピーター・ミルワード(著)森内薫・別宮貞徳(訳)『お茶とミサ：東と西の「一期一会」』、1995年4月、PHP研究所発行、53～54頁。
  - 32 高橋敏夫、24～25頁。
  - 33 増渕宗一、75頁。
  - 34 山田無庵『キリシタン千利休』、河出書房出版社、1995年。
  - 35 増渕宗一、55～57頁。
  - 36 バナー「ユスト高山右近」、カトリック中央協議会、(<https://www.cbci.catholic.jp/2015/10/01/10440/>)、2020年9月21日閲覧。
  - 37 高橋敏夫、35頁。

- 38 ピーター・ミルワード『お茶とミサ：東と西の「一期一会」』、110～113頁。
- 39 ピーター・ミルワード、110～112頁。
- 40 ピーター・ミルワード、112頁。
- 41 千玄室「巻頭の言葉：茶の湯が伝える平等・寛容の精神性」『知致』。
- 42 高橋敏夫『茶の湯の心で聖書を読めば』、32頁。
- 43 高橋敏夫、35頁。
- 44 高橋敏夫、33～34頁。
- 45 高橋敏夫、33～34頁。
- 46 高橋敏夫、39頁。
- 47 高橋敏夫、39頁。
- 48 ジョアン・ロドーリゲス（著）江馬務・佐野泰彦・土井忠生（訳）『日本教会史（上）』大航海時代双書、岩波文庫、1967年10月、638頁。
- 49 高橋敏夫、28～29、71頁
- 50 北国新聞社（編）『加賀百万石異聞 高山右近』、136頁。
- 51 大阪歴史博物館・大阪文化財研究所（編）『大坂：豊臣と徳川の時代（近代都市の考古学）』、55頁。
- 52 玉造稲荷神社 web site (<https://www.inari.or.jp/>)、2020年9月21日閲覧。
- 53 増渕宗一、48頁。
- 54 高橋裕史（著）『東インド巡査記』、平凡社、2005年、228頁。
- 55 ロイス・フロイス（著）松田毅・川崎桃太（訳）『完訳フロイス日本史（1）』、中央公論社、2000年、135～136頁。
- 56 堺市 web site (<https://www.city.sakai.lg.jp/kurashi/koen/shokai/zabieru.html>)、2020年9月21日閲覧。
- 57 増渕宗一、50頁。
- 58 クルサド（Crusado）は16世紀当時、ポルトガルの通貨単位である。1クルサドはおよそ3.5gの金貨であった。宣教師ロイス・フロイスは日本の貨幣価値を当時のポルトガルの通貨に換算して記録しているが、換算レートは金1枚（金44匁＝金10両）＝43クルサド、銀1枚（銀43匁）＝4.3クルサドであった。
- 59 増渕宗一、48頁。
- 60 増渕宗一、50頁。
- 61 ドン・ボスコ社（編）、53頁。
- 62 バナー「ユスト高山右近」、カトリック中央協議会、(<https://www.cbccj.catholic.jp/2015/10/01/10440/>)、2020年9月21日閲覧。
- 63 北国新聞社（編）、67頁。
- 64 安廷苑『細川ガラシャ：キリシタン史料から見た生涯』（中公新書 2264）、中央公論新社、2014年、47頁。
- 65 ドン・ボスコ社（編）、56頁。
- 66 H・チースリク『高山右近史話』、聖母文庫、2007年9月、108頁。
- 67 北国新聞社（編）、20頁。
- 68 H・チースリク、104頁。
- 69 北国新聞社（編）、56頁。
- 70 H・チースリク、113頁（「大阪発、1585年10月20日の書簡」）。
- 71 北国新聞社（編）、22頁。

- 72 H・チースリク、108～112頁。
- 73 ドン・ボスコ社（編）、57頁。
- 74 H・チースリク、113頁。
- 75 北国新聞社（編）、23頁。
- 76 北国新聞社（編）、23頁。

### 【参考文献】

- ・大阪歴史博物館・大阪文化財研究所（編）『大坂：豊臣と徳川の時代（近代都市の考古学）』、高志書院、2015年。
- ・松田毅一・川崎桃太（訳）『フロイス日本史』（第1巻～第8巻）、中央公論社、1977～1987年。
- ・松田毅一・川崎桃太（編訳）『フロイス「日本史」より：回想の織田信長』（中央新書328）、中央公論社、1989年。
- ・松田毅一・川崎桃太（編訳）『フロイス「日本史」より：秀吉と文禄の役』（中央新書349）中央公論社、1989年。
- ・松田毅一・川崎桃太（訳）『完訳フロイス日本人I（織田信長篇1）』、中央公論社、2000年。
- ・岡田章雄（訳注）『ヨーロッパ文化と日本文化』、岩波書店、1992年。
- ・ジョアン・ロドリゲス（著）江馬務・佐野泰彦・土井忠生（訳）『日本教会史（上巻）』（大航海時代叢書9）、岩波文庫、1967年。
- ・スムットニー・祐美（著）『茶の湯とイエズス会宣教師：中世の異文化交流』、思文閣出版、2019年。
- ・むろのつ編集部（編）『会報：むろのつ「特集：キリシタン」』、たつの市立室津海駅館内「嶋屋」友の会発行、2018年。
- ・京都造形芸術大学（編）『茶の湯を学ぶ』、角川書店、1999年。
- ・山田無庵（著）『キリシタン千利休』、河出書房出版社、1995年。
- ・増渕宗一（著）『茶道と十字架』、角川書店、1996年。
- ・ピーター・ミルワード（著）森内薫・別宮貞徳（訳）『お茶とミサ：東と西の「一期一会」』、PHP研究所、1995年。
- ・谷端昭夫（著）『日本史の中の茶道』、淡交社、2010年。
- ・谷端昭夫（著）『茶の湯の文化史：近世の茶人たち』（歴史文化ライブラリー82）、吉川弘文館、1999年。
- ・堺市博物館学芸課（編）『さかい利品の杜展示館案内』、堺市博物館発行、2015年。
- ・「堺を歩けば」制作委員会（編）『堺を歩けば』、140b（イチヨンマルビー）社、2017年。
- ・中井正弘（著）『堺意外史100話』、ホウユウ出版部、2019年。
- ・高橋敏夫（著）『茶の湯の心で聖書を読めば』、いのちのこば社、2006年。
- ・谷晃（著）『茶人たちの日本文化史』（講談社現代新書1878）、講談社、2007年。
- ・堺市博物館学芸課（編）『さかい利品の杜展示館案内』、堺市博物館、2015年。
- ・H・チースリク（著）『高山右近史話』、聖母文庫、2007年。
- ・高木一雄（著）『関西のキリシタン殉教地をゆく』、聖母文庫、2005年。
- ・ドン・ボスコ社（編）『高山右近：歴史・人物ガイド（その霊性をたどる旅）』、ドン・ボスコ社、2017年。
- ・北国新聞社（編）『加賀百万石異聞：高山右近』、北国新聞社、2012年。
- ・安廷苑『細川ガラシャ：キリシタン史料から見た生涯』（中公新書2264）、中央公論新社、2014年。
- ・塩谷直也（著）『うさおとあるく教会史』、日本キリスト教団出版局、2011年。
- ・倉沢行洋「茶道と宗教：キリシタン宣教師の見た日本の茶湯」『宗教哲学研究』、1988年。

